

ALT との授業は、多くの学校において定着し、さまざまな工夫が授業の中で見られます。しかし、私が初めて ALT とチーム・ティーチングに臨んだのは、昭和 56 年 (1981 年) でした。当時としては早い取り組みでしたが、年間 5 時間程と少なかったため、授業に工夫をというよりは、生の英語に触れられ、異文化を目の前で感じることができる機会として、チーム・ティーチングを捉えていました。生徒の言語活動は ALT への簡単な英語での質問で、その他はほとんど ALT の話を JTE の通訳を通して理解するというような授業でした。そのような授業の内容であっても、生徒たちは、チーム・ティーチングに少し驚きながら授業に臨んでいました。

さて、今はコミュニケーションの時代です。私たち教師に求められるのは、ALT がいてもいなくても、コミュニケーションを中心にした授業です。最近では、アクティブ・ラーニングの考え方も現れ、思考、判断、表現、発信の学びの形態が大切な要素となっています。授業を活性化するためには、ただ生の英語を聞くだけではうまくいきません。生徒は自ら考え、英語を使って情報を発信し、受け手はその情報を得て、なんらかの活動に結びつけるような授業を作っていかなければなりません。そのためには、生徒主導の学習形態を構築していくことが必要です。私は、生徒主導の学習形態として、ペアワーク、グループワークを活用しています。活動の前提として 3 つ考えておかなければいけないことがあります。

- ① ペア、グループの作り方
- ② 学習内容
- ③ 教師の働き

ここでは、①について考えたいと思います。ペアワーク、グループワークは、今やどの先生も取り入れている活動だと思っていましたが、そうでもない

のだということを、これまでに見学した研究授業の中で知りました。理由をたずねると、生徒によっては、相手によって取り組まないことがあるため、うまく活動させられないということでした。そういうことが全くないとは言いきれませんが、そうならないよう、私たち教師には豊かな生徒指導力が必要です。残念ながら教師は経験を積んでも、クラスの座席づくりによっては、生徒にうまく活動させられないときもあります。また、能力が偏ると互いに協力して学ぶことが難しくなります。ですから、英語独自の座席を考えなければならないかもしれません。

私は英語学習教室で授業を行うときは、出席番号の座席、普通教室ではクラスの座席としていましたが、slow learners の生徒がいるなど配慮すべき状況があるときには、最初からペアを作るのではなく、3 人グループを作り、その中にモデルのペアを作ることによって、うまくできない生徒に学んでもらうことにしていました。教師は同じような活動にならないように、クラスの状況にあわせ、学習内容にあったペア作りに工夫をしなければなりません。そしていつも生徒に完璧な活動をさせようと思ってしまうと、生徒との人間関係が崩れてしまうこともあるので、心にゆとりをもった指導が大切です。

グループワークにおいては、1 グループ 4 人くらいだと、全ての生徒が活動でき、傍観者も生まれないのでよいと思います。教科書の学習のまとめとして、学習した内容を英語で説明する場合、1 人でできる生徒もいますが、段階的にグループでパラグラフごとに発表させたり、slow learners の場合は教科書と同じ文を言わせたりしてもよいかと思います。

教師が「これはできない」というスタンスで取り組むと何も実を結ばないでしょう。生徒にチャンスを与えることを忘れないようにしたいものです。